
桜の木の下で

如月 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の木の下で

【EZコード】

N3407B

【作者名】

如月 雪

【あらすじ】

桜の木の下で、僕は彼女に出会った。六歳年上の英語の教師。彼女の苦しみを癒せるのは・・・

彼女に出逢ったのは、四月の晴れた日。この高校のシンボルである古い桜の大木の下で、彼女は語り掛けた。彼女は幹を抱き締めていた。

都立桜木高校

僕が教師になつて始めて勤めた高校だ。大学を卒業して、二年講師を勤めた。採用試験に合格したのが七年前。それからズッとこの高校で、物理の教師をしている。

この春の異動で五人の教師が動いた。英語の教師が一人。社会が一人。体育が一人。そして、校長。

彼女は、英語の教師、真藤優奈だ。四月始めの職員会議で自己紹介があつた。

・・三十八歳。独身か既婚か？・・判らない。
が、左手の薬指には、指輪が光っている・・・ということは・・既婚者

「葛先生？宜しくお願ひしますね。」

彼女が、隣の席に着き右手を差し出した。真藤先生は一年二組の副担任になつたのだ。

因みに、僕が一年三組の担任だ。

「ほら、宜しくお願ひします。」

細い華奢な指だ。爪が綺麗に整えられている。

「真藤先生は、前は瑞穂高校でしたよね？」

「ええ。そうです。三年いました。その前は長野の私立です。この高校で三校目ですね。」

「どうなんですか？僕はまだ、ここしか知らないので、他の学校はどうなんでしょうね？」

「一緒にですよ。どこも。」

なんだか、あしらわれているみたいだ……。口調が冷たい……。

新学期は何かと忙しく、慌しい。

が・・忙しい間を縫つて、新しくきた先生の歓迎会が、創作和食の「美園」で執り行われた。

校長の長い話が終わり、教頭の乾杯の挨拶の後は 無礼講だ。

「では、真藤先生一杯どうぞ」

僕は、ビール瓶をもつて優奈先生に注いでいた。

「ありがとうございます。葛先生もどうぞ」

「葛先生は、独身なんですか？」

「あはは。去年結婚したんです。」

「あら。おめでとうございます。新婚さんなんですね？」

「はい。もうすぐ、子供が生まれるんですよ。」

「あらあら。おめでとうございます。子供はいいですよね？ 本当に癒されます。」

「真藤先生は お子さんはいらっしゃるのですか？」

ふつと 優奈の顔が曇つたような気がした。

「ええ。一人。男の子です。」

やつぱり、結婚しているんだな・・・

「んな奥さんが家にいたら、何処も寄りすまにすぐ戻っちゃうな

・・・

「真藤先生みたいな奥さんなら、田那さん血縁でしょうね？」

「・・・おこ。おこ。地雷か？まさか バツ1？・・・

「そりかしらね？そんなこと言つてくれたこと無いから・・・

・・・まあ、いつも一緒にいるみたいなかんじですけど・・・ね・・・

」

優奈は幸せそうな、切なそうな表情を浮かべた。

・・わっと・・・愛されているんだろうな・・・

僕の胸の奥が キュと痛くなつた・・・

「先生。帰りは電車ですか？」僕は、真藤先生に尋ねていた。

「いいえ。車で迎えに来てくれるの・・・

あつ 来ました。じゃあ お先に わよはありがとうございました。」

シルバーのラウンジクルーザーが、少し先で止まつてゐる。

・・・いいな・・お迎えか・・愛だよな・・・・

夏

夏休みに入らうかと、うつ七月の中頃、僕の元に、一通の手紙が届いた。

名古屋の実家に出産の為に帰っている妻の美由紀からだつた。

・・変だな？いつもなら電話かメールで済ますのに？
一抹の不安を胸に、白い封筒を開けた。

・・えつ・・・

ナンナンダ？ これって離婚届か？ なつ・・えつ・・・チヨ
ツとなに？・・・

僕は直ぐに名古屋に電話を掛けた。

「もしもし、お母さん？僕 葉月ですが、美由紀に代わっていただ
けませんか？」

美由紀の携帯は既に解約されていたのだ。

「ああ 葉月さん。届いたのね？美由紀はもう休んでいるから私が
受けたまるわ。」

受話器の向こうから冷たい声が聞こえてくる。

葉月には何が何だかわからない。

「お母さんも知つておられるのですか？」

「ええ。主人も、もちろん美由紀も納得の上のことですよ。」

「子供だって産まれてくるのですよ？僕の子供です。」「

「子供は一橋の姓を継がせますから、心配要りません。それとも、貴方が一橋の姓を継いでくれますの？」

「それは・・・結婚前に話しあつたことではありますんか？僕は葛の一人息子なんですから、無理です。一橋家には息子さんがいるではありませんか？」

そう、一橋美由紀と結婚するとき、婿養子に入つてくれと美由紀に頼まれた。

しかし葛の家には僕以外の子供はいなかつたし、何より自分の姓を捨てる事など僕の頭には無かつたのだ。

美由紀が折れて、葛に嫁に来てくれたという負い目があるからか、美由紀が頻繁に実家に帰ることを黙認してきた。子供が出来たら落ち着いてくれるだらうと楽観していたのだ。

「美由紀も もうソチラに帰らないと言つてこます。離婚届に印を押して送つて下さいね。では。」

・・ガチャン・・

「ちょっと・・ちょっと待つてください」

なんだ・・・どうして？・・・俺の子供なんだぞ・・・勝手のされてたまるか・・・

次の日は、まだ授業が入っているため休むことは出来ない。苛々している気持ちのまま生徒に接していくもろくなことがない。案の定、他愛のないことで女子生徒を泣かせてしまった。

副担任の真藤先生が 女子生徒をなだめて俺を叱った。本当に情け

ない。

「葛先生ちょっとお話してよろしいですか？」

「はい。済みません。迷惑をかけてしまって……」

すっかりし�ょげてしまつた俺は、年上の教師の後に付いて英語教官室に入つて行つた。

英語教官室には机が五脚あり、窓際にオレンジのソファが置いてあつた。

真藤先生がミルクをタップリ入れた珈琲を渡してくれたとき、指先が触れた。気がした。

「先生何かあつたんですか？ 普段の先生ならあんなこといわないのでしょう？ 私で良ければ話してみませんか？」

まるで幼子に話すように暖かい声が聞こえてきた。

木枯らしが吹き荒ぶ荒野に暖かい日の光が射しこんだかのよう

・

いつの間にか僕は泣いていたみたいだ。マグカップを両手に握つたまま体を震わせていた。

何も言わず、背中を撫でてくれる女性に身を委ね一頬り涙を流した後 ポツリポツリと話だした。

「妻が、実家に帰つたまま離婚届を送りつけてきたんです。何が何だか分からなくて……

子供も出来るのに、どうして……

「奥さまとは、恋愛ですか？」

「はい。友達の結婚式で知り合つて、一年半付き合つて結婚しました。美由紀の実家は、名古屋で薬局を経営しているのですが、長男

は家を出て大阪ですんでいます。それで、薬剤師の資格を持つ美由紀に跡を継がせたかったみたいなんです。 結婚するときも、随分揉めました。けれど、子供が出来たため向こうの親が折ってくれたんです。 フウ -

今思えば、始めからそのつもりだつたんですね。

結婚して七ヶ月。美由紀と一緒に過ごした結婚生活は数える程しかないんですから……」「

溜め息と共に、葛の苦悩が溢れだしていた。

「葛先生は奥様のことを見ていませんか？」

窓の外を眺めながら 真崩先生が墓は間に

・・・・美曲紀のことを愛しているのか？・・・

結婚したのが一月の末。新婚旅行も美由紀のツワリがきつくて行けなかつた。体が辛いからと、三月から四月はズッと実家に帰つたままだつた。その時期は、学校も忙しく美由紀に構つてやれかつた葉月にとつて渡りに舟であつたのだ。そのつけが回つて來たと言つのか？

確かに美由紀の我儘も、お嬢様育ちだから仕方が無いと諦めていた。
それも可愛く思えて守つてあげなければと感じていたのだ。

兄弟のいない僕にとって、妹のような存在だった。だから、面と向かって『愛しているのか？』と聞かれたら、即座に愛していると返事出来ない自分がいた。

「先生？僕はどうすれば良いのでしょうか？」

縋るような表情で、年上の綺麗な女性に尋ねてしまう。悪い癖だ。

昔から、年上の女性には甘えてしまひ。

「そうね。先ずは一人でキッチンと話すべきだわ。子供の為にも、両親は揃っている方が良いんですから・・・。幾ら、経済的に恵まれているといつても産まれた時から父親がいなかつたら、子供にとつて余り良い環境じゃないでしょ。」

・・そうだ。産まれてくる子供に父親の顔を見せられないんだ。

「そうですよね？ 今週末にでも、名古屋に行つてきます。」

「何言つてるんですか？ 今から行きなさいー泊まる所ぐらうどうにでもなるでしょ？ 明日の授業は 自由にしておきます。校長と教頭には、私がちゃんと話しておきますので 急いで行つてください！」 優奈に背中を押され、葉月はその日の内に名古屋に降り立つていた。

タクシーで 一橋の家の前まで着くと、リビングから賑やかな笑い声が聞こえてくる。

不審に思い、玄関のチャイムを鳴らさず庭先に足を進めた。

「進さん お腹の子供の父親になつて頂けるなんて 本当に有りがたいわ！ 美由紀が独りで育てて行かなればいけないと可哀想に思つていたんですけど。」

？どういうことなんだ？事態が見えない・・・

「僕は元々美由紀ちゃんが好きだつたんですから、美由紀ちゃんが結婚したと聞いてショックを受けていたんです。僕の努める病院の待合で会つた時は驚きました。大きなお腹を抱えて、辛そつだつたんですよ。」

「富坂先輩に助けて頂いた時は、久しぶりに独りで百貨店に出向い

たんだけど、体調が思わしくなくて直ぐに病院に行つた日なの。私の気持が赤ちゃんにも判るのかしら？って思ったわ。」

甘えるような声で美由紀が話している。

「そりなんですよ。旦那さまとまともにいってないのは美由紀のせいでは無いのに・・・この子は何もかも自分を責めて・・可哀想に・・こんなことなら、結婚を許すんじゃ無かつたですよ・・」

声を震わせて姑が話している。

?????僕は 訳が分からなくなつた。

それでも、自分を貶めている一橋の家族に怒りが込み上げてきた。直ぐに怒鳴り込もうかと思つたのだが、それすら馬鹿らしく思えてきた。

この人達は既に葉月を切つていて。新しい男を取り込もうとしているのだ。

この富坂という男がどういう人間かは知らない。しかし、この家に入ろうかという男だ。それ相応の野心家である筈だ。

自分の子供が他人の子供として生きていいくことに、少なからず抵抗は有るがこれも美由紀が望んだ事なのだ。

何だか、もう美由紀に振り回されるのは沢山だーと考えていた。

結局その夜、僕は一橋の家には顔を見せず、名古屋駅の近くのビジネスホテルに泊まった。

「モシモシこんばんわ。真藤先生ですか？葛です。」

「葛先生? 気になつていたんですね。もう名古屋に着いたんですね?」

「はい。今 名古屋駅の近くのホテルに居ます。」

「コンビニで買つたビールと巻き寿司で夕飯にしているところだつた。」

「奥さまとは話されましたか?」

「いいえ。もう ここのまま帰らつかと思つてゐるんです。」

「何が在りました?」

僕は先程聞いてしまつた話を、全て話していた。もう夫婦が元に戻ることがないことも。

話をしながら呑んでいたビールは一本目になつてゐる。

真藤先生と話していると気持ちが落ち着いてくるような気がした。

「明日は 帰ります。」

「葛先生? 別れるにしても明日はキチンと話した方が良いと思います。事務的な事が結構あると思うので 弁護士立てても良いかも知れませんね。」

弁護士か・・今まで自分には程遠い世界の出来事にしか存在しない職業だったのにな・・・

他人にまかせた方が良いのかも知れない。

「でも、弁護士さんなんて知らないんですよ。誰かれなしにお願いするのも抵抗がありますし。」窓の外には、ネオンと街の灯りが煌めいていると言つのに 僕の瞳の奥には虚無しか無かつた。

「モシモシ? 先生? 葉月先生? しつかりしてますか?」

「大丈夫ですか?」

急に黙り込んだ葛に、優奈が心配そうな声をかけていた。

「すみません。何だか疲れてしまつて・・・

もし、今隣に優奈がいればきっと泣いていただろう・・・

「先生? 明日は、奥様と話したあと又お電話頂けますか? 知り

会この弁護士に当たつてみますので・・・

「はい。ありがとうございます。助かります。」

結局それから僕はあと一本カップ酒を空けた。それでもしなければ眠ることなど出来なかつたのだ。

新幹線のホームで、僕は真藤優奈に電話を入れた。

「先生すみません。もう昼休憩ですか？」

「ええ。校長と教頭には、熱があつて休むと言つておきました。職

朝前に連絡があつたと。」

穏やかなアルトが聞こえてくる。

「何から何までありがとうございました。今から名古屋を出ます」「お話は出来ましたか？」

「はい。離婚することにきめていました。後の事は、向こうの親が来て采配するみたいですよ。」

離婚がこんなに疲れるものだとは、思わなかつた。神経が参つてしまつている。

ホームに出発のベルが成響く。

「葛先生？ 帰つてきたらうちに来てください。息子も今日は早く帰るらしいので暖かいシチューを作つたんです。ね？ 東京駅に着いたら、又電話してください。キットですよー」

葉月は涙が溢れてくるのを止めることが出来なかつた。独りで家

に帰ることの寂しさを身に染みて感じていたのだ。

東京駅に着いたとき、あー 終わったんだなー と 思つた。
名古屋でも新幹線の中でも 張りつめていた糸がふつと緩む。

優奈が言った駅に着くと、あの夜に見掛けたラウンドクルーザー
が止まっていた。

車のドアにもたれて煙草をすっている青年。
僕を見つけて、携帯灰皿で煙草を消した。

「葛先生ですか？」進藤 匠です。初めまして」

爽やかな笑顔を向けているが、目の奥は笑っていない。敵意が見え
た気がする。

進藤 匠 たくみ W大法学部一回生の二十歳。進藤優奈の一人息子。
少し茶色に染めた髪の毛は 緩やかにウェーブがかかっている。く
せ毛かな？ 今時の青年だ。 左耳にはピアスが一つ並んでいた。
二十歳か？

ん？ 待てよ？

進藤先生は三十八歳だろ？

つて言つことは十八歳の時の子供かよ？！

嘘だろ？

優奈の作ったシチューはとても美味しかった。本当に久々の家庭料理だ。

美由紀が名古屋に帰つたのが六月の始め。それから、葛は寡生活を強いられていた。学生時代から、独り住まいをしていた為、妻が居なくとも支障は無いのだが、侘しさはないようがなかつた。

「久しぶりにまともな食事をしました。独りだとついコンビニ弁当と酒になつてしまふので・・・」

「お口に合うか心配だったんですが、今日は匠が帰つてくる日だったので匠の好物を作つたんです」

無愛想な表情で食事をしている進藤匠。

明らかに僕に対して警戒感を持つてゐるみたいだ。

二十歳の国立大の大学生。法学部に在学しているそうだ。彼の先輩の弁護士が僕の力になつてくれると言う。母親の頼みだから仕方が無いのか？

それにしても、旦那が帰つてくる気配がない。

「旦那さんは今日はまだお仕事なんですか？」

窓の外は既に暗闇に閉ざされている。時計の針は、八時を指そうとしていた。

「・・ええ・・あの人は遠くに行つているの・・・・・」

一瞬、部屋の空気がひんやりしたような気がする。匠の視線が鋭く光った・・・ような・・・

・・・単身赴任か？大変だな？・・・

久々の暖かい家庭料理に僕の神経はしんじられないぐらい鈍感になっていた。

「単身赴任だつたら先生寂しいですね？」

張り詰めていた空気が和らいだ。

・・バカか？・・・

匠からそんな独り言が漏れたのを聞きそびれていた。

「ハハハハハ。　あんた天然だろ？」

？？えつ？？　僕？　　何か変なこと言つたっけ？

敵対心丸出しだつた彼から　それが消えていた。
何だか肝心なことを聞き忘れたかのような

月曜日に校長と教頭に　離婚調停に入った事を手短に伝えた。

険しい顔で話を聞いていた校長は、最後に少し微笑んで口を開いた。
「葛先生の事情は分かりました。大変でしょうが良かつたのかも知れませんね？失礼ですが、の方は貴方には似合つておりませんでした。」

後一年で定年を迎える古城校長は僕にとつて父の様な存在だった。

教師を志したのもこの人に憧れてのことだ。いつも優しくどの生徒にも平等に接していた。穏やかそうに見えて空手の有段者でもある古城は不良生徒にも一目置かれていた。

結婚が決まった時 美由紀を連れて古城校長の自宅に挨拶に行つたときの事を言つてゐるのかも知れない。

清貧を絵に書いた様な古い小さな民家が古城の自宅だった。古くても綺麗に磨かれ落ち着いた風情が僕にとつてはまるで自宅に帰つたかのような錯覚を起こしてしまつ程に居心地が良かつた。

それを彼女は、あからさまに嫌な顔を見せ上に上がるのさえ嫌がつた。まるで自分の服が汚れてしまうかのように・・・

僕は、量販店のスーツを着ていたが、美由紀はCHANELの白いスーツだった。

そう その頃から僕は間違つた選択をしていたのだ。

過去

男性は離婚をしても、対外的には弊害が無い。指輪が外されるだけの話だ。 夏休み中に僕たちの離婚は正式に成立した。

産まれてきた子供は女の子だった。

親権も美由紀に渡し、僕には父親になつた実感など全く無かつた。抱かせてももらえなかつたのだから。

僕の方に弁護士が着いたと知ると、美由紀の側も弁護士を出してきた。

お互いが顔を合わす機会が少なくなり、少しは気持ちの切り替えが出来てきた。

匠君の先輩の弁護士は若いけれど、押しのきくやりのようだ。

あちら側が養育費を要求してきたが、今回の離婚に関しては美由紀に非が有るため、こちら側から慰謝料を請求した。僕は慰謝料などを考えたことはなかつたが、駆け引きなのだろう。 弁護士同士の話し合いの結果、養育費と慰謝料をひきひきにすることで合意した。

彼女にとつては養育費など貰うつもりなどもうとう無かつたのだろう。 ただ 子供が欲しかつただけなのだから・・

けれど、僕が弁護士を立てたことで意地になつていたのかも知れない。

兎に角、僕の結婚生活は半年で破綻したのだ。

「ありがとうございました。匠君には何とお礼を言つて良いか。 加美先生にも何から何までお世話になつて、ありがとうございました。」

三軒茶屋のイタリアレストラン で葉月は匠と加美弁護士にラン

チを御馳走していた。本当ならもっと豪勢にお礼をしなければいけないところだが、報酬以外の贈答を断られ、それでは僕の気持ちが収まらないと言つと、匠と一緒に大学の近くのランチを食べましょうと誘われた。

「いえいえ 私も離婚調停は始めてでしたのでいい経験になりました。今回のケースは、此方に全く非が無かつたので遣りやすかつたんですよ。 あちら側も早く終わらせたかったみたいですね。」

人気店だと言う店のパスタはめちゃくちゃ美味しかった。

食後のカプチーノを飲んでいたとき、匠がおもむろに口を開いた。

「あんたさ。お袋のことどう思つてるんだよ?」 ぶつきらぼうこ匠が聞いてきた。

「良い先輩だと思っています。良く気が付くし、生徒にも好かれているし。」

僕にはそうとしか言ひようが無かつた。優奈に女性として好意を持ち始めていた葉月だつたが、人妻である優奈は手の届かない人だ。どんなに葉月がこがれても叶うことの無い恋なのだ。そんな葉月の気持ちを知りもしない匠は 大きなため息をついていた。 マジで天然だよな?

北斗の拳の着メロが流れてきた。

「ちょっと 悪い。」

匠が携帯を持って店の外に出ていった。

フー

匠君と話すと緊張する。いつも、敵視されている気がした。

「気を悪くしないでくださいね？」

「は？」

「アイシは母親のことになると 信じられないぐらい神経質になるとですよ。周りから『マザコン』だと言われているんですが、アイツに言わせると母親を大切にしない子供なんて最低らしい。まあ母独り子独りだから仕方ないんだけどね」

？母独り子独りだつて?????

「ちよ・ちよっと待つて下さいー今 何で・・・」

匠が戻つて来てしまつた。

何だつて？優奈さんの旦那さんはどうなつているんだ？
飲み会にも迎えに来ていたじゃないかよ？ ハツ ハハー！

どうなつてるんだよ？

頭の中が混乱している。思考能力〇だ。

* * * *

其からの僕は何を聞かれても 上の空で匠君は不思議そうに大学に戻つて行つた。加美弁護士も大学に用があるからと、匠君と一緒につてしまつた。

自分の部屋に戻つてからも、考へがまとまらない。それでいて、優奈さんにも聞ける筈は無かつた。

九月の新学期は、慌ただしく過ぎていく。体育祭に文化祭 クラブの新人戦

学校の一学期は何処でも、忙しく慌ただしいものだ。

中間考査が発表になり漸く他の事を考える余裕が生まれた。そうなると優奈の事が気になってくる。進藤先生は殆んど英語教官室で仕事をしている。物理教官室にいる僕とは余り会うことがない。

「進藤先生は今日 日直でしたよね?」職朝（朝の打合せ）で、僕は進藤先生に声を掛けた。

「はい。雨が降りそぞだから嫌ですよな。」今にも降り出しそうな曇が立ち込めていた。

「進藤先生はこの高校の出身って聞いたんですけど?」葉月は鎌を掛けた。

「嫌だわ。誰に聞いたんですか? そなんですよ。八十期生なんですよ。歳を感じちゃいますね?」

恥ずかしそうに笑う優奈は何とも可愛い。年上の女性に可愛いと思うことはおかしいのだろうか?

そうだ。卒業アルバムがあるはずだ。図書室だらうか? 事務所で聞いてみよう。

悲劇（前書き）

葉月が自分の気持ちに気付くとき・・・・・

「すみません? 卒業アルバムを貸して頂きたいのですが?」葉月は事務室を訪れ用件を伝えた。

事務室の少し年配の女性が対応してくれた。

「はい。何年の物でしょう?」

「80期生の分なんですが・・・」葉月は少なからず後ろめたい気持ちを隠して平静を装った。

事務員は「ちょっと待つて下さいね。」そう言つて隣の部屋に入つていった。そんなに待ち時間はかからずに一冊のアルバムを持って来てくれた。

「ここに見るだけなら良いですが、持ち出すのであればこの書類を書いて貰えますか? まあ、葛先生ってわかつているから良いんですけど、一応手続きなので、「ごめんなさいね。」貸出書には氏名住所、電話番号と借出目的、借り出し期間と返却予定期を書かなければいけなかつた。

書類を書き込み、返却日は明日にした。

葉月は借りたアルバムを胸に抱かえ、物理教室内に舞い戻つた。後ろめたい事など何も無いのに、胸がドキドキ波打ち、血圧が上がつていいようひつだ。

(・・先ずは落ち着け・・) 葉月はコーヒーを入れてソファーに座つた。

まるでH口本を初めて見る中学生のよつこ、口が乾く。

「クツと唾を飲み込んで真藤優奈の名前を探した。名字は真藤で無

い確率が高い。優奈で探した方が良いだらう。先ずは1組からだ。
居ない。次は2組。ここにも居ない。3組。

・・・・・ 匠だ・・・・・いや・・・違う・・・

同じクラスに優奈の写真もあった。

優奈の名字は・・・・・真藤・・・・・

匠に良く似た男子生徒は伊勢富匠吾

きっと彼が優奈の夫だ。

未だ幼さが残る優奈の写真。軟らかい少し茶色がかつた髪質は変わっていない。

前髪を後ろでまとめて、聰明なおでこを出している。此方を見据えた瞳は何かに挑むように強い光を放っていた。

伊勢富匠吾

少し長めの髪の毛は癖毛なのか、緩くウェーブがかかっている。
匠と同じように切れ長の瞳とスーと通った鼻梁、引き締まった口元には聰明さが表れている。

(見なければ良かつた)

余りにも綺麗な匠吾の写真に打ちのめされ、始めの目的すら忘れていた。

そして一人の揃つた写真は以外な所で見つけた。

生徒会の五役

伊勢宮匠吾は生徒会長。真藤優奈は書記だった。

五人の中には、男子が後二人、女子が一人、隣には顧問の教師

あれ？この人は？

顧問の教師は今も生徒会を纏めているこの高校の最古参、社会科の古澤晴夫先生ではないか。確かに今年で定年を迎えるはずだ。

コンコン。社会科教官室のドアを開け

「古澤先生！ 今時間空いてますか？ チョッと相談に乗つて頂きた
いのですが？」 ソファーで新聞を広げている古澤に声を掛けた。

「ああ 葛先生 どうした？ また生徒にやられたか？」

講師の時から知っている古澤にとって、葉月は息子の様な者だ。新任の頃、生徒にからかわれたり、授業に失敗した時には励まし見守つてくれた恩師もある。

「上手い豆が入ったんだよ。飲むか？」 葉月の返事も聞かず古澤は珈琲メーカーをセットしていた。

いい香りが狭い教官室に漂う。

「ブラックで良いよな？」 と白いマグカップを手渡された。

珈琲を飲みながら、意を決して口を開いた。

「古澤先生は、真藤先生を教えたことがあるんですか？」

「おお何を聞くかと思えば、そんなことか？ 彼女のことが気になる
かね？」

意味深な笑みを浮かべて古澤が返答してきた。

「いや。離婚のことでの真藤先生にお世話になつたんですよ。だから、
お礼に何か喜ばれるものを・・・と思いまして・・・随分間抜けな
いい訳だ。

「ははは。まあ・・・良いがね。」 先ほどまで笑みを浮かべていた古
澤の瞳には真剣な光が宿っていた。

「人の過去を聞こうと言つのなら、覚悟があるんだろうね？私も誰かれなしに話す訳ではない。君の人柄を感じて話すが心して聞いた方がいい。生半可な気持ちでは無いんだろうね？」いつになくきつい口調の古澤先生が葉月に問いかける。まるで父親のように。

「・はつはい。真面目です。」俺は何を言つてているのだ。支離滅裂じやないか。

葉月の動搖を目にして古澤はフウッと表情を和らげた。

「ああ、だいぶ前だ。前に私がこの高校に居た頃だよ。一年間だが彼女は生徒会の書記をしてくれた。忙しいのに良くやってくれていたよ。・・・しかし・・彼女が教師になるとは思わなかつたな」

「どうしてですか？」

「いや。彼女は・・・あのころ・・・教師を信用していなかつたらね。」

思い出すかのように、古澤の瞳がゆらゆらと揺れている。

「どうしてですか？」

「真藤君は、母子家庭だつたんだよ。今では珍しくも無いんだけれどね？」

彼女は英語の成績が抜群に良かつた。シェイクスピアが好きだと言つていた。けれど、その頃の英語教師は、受験英語しか教えない人でね。偏見もあり、彼女を差別的な目で見ていたんだよ。

そんな教師を信用すると思うかね？

それに・・・・・彼女は・・・高3の時大切な人を一人も亡くしたんだ・・・・・」

「ゴクリ」と葉月の喉が動いた。

「それは・・誰ですか？・・・」

「たつた一人の肉親である母親と、恋人の伊勢宮匠吾君だ。」

・・・えつ・・・死んだ・・・伊勢宮匠吾が・・・・そんな・

・・・・・

だつて・・・匠君は彼の・・・・?・・・・

「真藤君の母親が亡くなつたのは、夏休みも終わりに近い日だつた。暑い暑いその日に心筋梗塞でなくなつてしまつたんだよ。あのときの彼女の姿は今でも目に焼きついている。泣き喫くでもなく、縋りつくでもなく、ただ悲しみが彼女を殺してしまつんぢやないかと思つたよ。

けれど、彼女は大学受験のために、九月の半ばから学校に出てきた。彼女を立ち直らせたのは、伊勢宮の存在だつた。伊勢宮は伊勢宮財閥の一人息子だつた。金持ち特有の傲慢さなど欠片も無いイイヤツでな。秀才で人望もあり男前だつた。伊勢宮と新藤は本当に人目を引く綺麗なカツブルだつた。

しかし・・・アイツも・・・彼女を置いて遺つてしまつたんだ。Christmasの夜、事故で呆氣なく遣つてしまつたんだよ。」

唖然とする葉月の顔を横目で見て古澤は話を続けた。

「真藤君のアパートの近くで事故は起つた。知らせを受けて私が駆け付けた時には、彼は病院で白い布を被せられていた。

伊勢宮の家族が彼の遺体に縋り付いて泣き崩れていたが、彼女の姿はその場には無かつた。告別式にも来ていなかつた真藤君は卒業まで学校に来ることはなかつた。担任が何度も足を運んで入試だけは受けるように説得したらしい。その時の彼女は青白い顔をして今にも折れそうな程に瘦せていた。「ため息混じりの話は重苦しく葉月の胸に沈んでゆく。

「俺も何度か訪ねてみたが、いくら生徒とは言え独り暮らしの女性の部屋に男が長居することは出来ない。

彼女はもう一人の女性なのだからな。

痛々しいぐらい憔悴した真藤君は差し入れした食べ物を直ぐに吐いてしまつたんだよ。

結局、彼女はその年の受験をしなかつた。卒業式にも顔を出すことが出来なかつた程悲しみと絶望が彼女を支配していたんだ。私はその年の異動で瑞穂高校に変わつたから詳しい事はわからないが、この春に真藤君に聞いた所によると翌年受験をして信州大学に進学し

たらしい。

息子が1人いるらしいから、キットいい出会いをしたんだろう。姓が変わつていないところをみたら婿に来てもらつたのかも知れないね。でも、そんなことはどうでも良いんだ。彼女が幸せになつてくれて本当に良かつたよ。」まるで自分の娘のように真藤優奈の身上を心配している。

その顔を見ていて、葉月は確信した。

・・古澤は知らない・・真藤先生の息子の父親が伊勢富だということを・・

優奈が立ち直つたのは匠の存在があつたからだ。キット並大抵の決心ではないだろう。まだ二十歳にも成らない少女がたつた独りで子供を育てるのだ。もしかしたら誰か助けてくれる人がいたのかも知れない。けれど一番の協力者であるだろう母親が居ない。優奈がどんな想いで匠を育ててきたのか・・

・・・だから・・葉月の離婚を我が事のように心配してくれたのか・・

加美弁護士は匠のことを母独り子独りと言つていた。

そうだとしたら、伊勢富との死別から優奈は誰とも結婚していないのではないか?考えられるだろつ。彼女の姓は真藤のままだ。

知つてしまつて、良かつたのか?知つたところでどうなるのか?僕はどうすればいい?彼女に対しての思いはどうぞぐらいのものなのか?

優奈が既婚者だと思つていたから自分の気持ちに蓋をしていたのか?

美由紀との離婚にもあまりショックを受けなかつたのは、優奈の存

在があったからでは無いのか？

何を考えても？マークで終わってしまつ。
僕はどうすれば良いのだろう・・・・・

聞かなければ良かつた。

俺は、野次馬根性を出して彼女の過去を暴きたかっただけなのか？

知りたくなかった・・・

それが本音だ

彼女の苦しみも悲しみすら、俺の力ではどうにも出来ない。

その無力感に苛まれる。

意識してはいけない。

彼女に悟られてはいけない

けれど、知らないといつ嘘をつくのは 俺には出来そうにない。

喜怒哀楽が直ぐ顔に出ると 言われ続けていた俺だ。
繕いなど 直ぐばれてしまう。

浅はかな

「葛先生? 何か変ですね?」

真藤優奈が怪訝な顔で、俺の隣に座った。

「い いえ な 何も 無いですよ?」

「そうですか? 顔色が悪いみたいですよ?」

「ありがとうございます。大丈夫ですから・・・」

彼女の視線が 惧い

ブブ

ボーッとした頭のまま交差点を渡っていると、シルバーメタリックのランドクルーザーが合図をしていました。

「おい? 何してるんだよ? 信昂 赤だぞ?」

匠が呆れた顔を窓から出していった。

「たつ たつ 匠君?」

今の葉月の状態で 匠に顔を合わせることは 白爆に値する。
葉月は思わず、顔を逸らしてしまった。

出逢いたくない奴に会ってしまった
草に、匠は思わず苦笑していた。
あからさまな葉月の仕

(解りやすい人だよな)

「おい? 乗つてけよ。送るから!」

ぶつかりそうな口調の奥に 優しさが見え隠れする。
匠独特の心遣いだ。

今更 断るのも避けている事を証明するみたいに思え 成るべく
匠の顔を見ないよう車に乗り込んだ。

ククク・・・

匠の口元に苦笑が浮かぶ。

「なあ 先生？ 何かあったのか？生徒に苛められたとか？まさかとは思うが、生徒に手を出したとか？」（まあ それは有り得ないだろうが・・・）

ハンドルを握りしめ匠が 葉月に尋ねた。

「匠君は 自分の父親について聞いたことがあるのかい？」

「はあ？」

考へても見なかつた質問に 匠はどう答えて良いか判らなかつた。

「じこつ 知らないはずだよな？　お袋が話すはずもないし・・・。
・どうよ？」

「あんたが聞いてるやつあるんだよ？」
抑揚のない声が 匠の口から出でた。

フロントガラスを見つめている瞳には、対向車のライトが映し出され何を考えているか、其から読むことは出来ない。

「そりだよね。俺が浅はかだったんだよ。余りにも無神経すぎた。
最悪だ！」

匠に言い訳するわけでもなく、まるで自分に言い訳するように独り言を言った。

? ? ?

・・・まさか・・・

「知っているのか？」

長い沈黙の後、匠が口を開いた。

・・何を？・・などと聞かなくても、多分其れだけで判るはずだ。

「ああ・・・どうすれば良いか解りないんだ。どう接して良いか解らないんだ。」

絞り出す様な葉月の声

生半可な気持ちで、知つてしまつたのではないだろう。

「普通で良いんじやないか？ お袋だって誰にも話していない事なんだから。今までと同じようこ、接してやつてくれないか？」

それとも、軽蔑したか？

匠の口調は、優しくもあり厳しくもあつた。

「まさか！ そんなこと有り得ない。君は俺を侮辱するのか？」
真実を知つた所で、優奈に対する気持ちが薄れてゆくなど有り得ないのだ。

そんな葉月の真剣な顔を見て匠は何とも言えない笑みを浮かべた。

「悪い。試すような真似をして。

あなたの本気を知りたかつただけなんだ。」 真摯に頭を下げる匠の姿には、いつもの傲慢さは見当たらなかつた。

匠は葉月を乗せて、彼のバイト先であるバーの駐車場に入つて行つた。

そこは 学生達の溜まり場というより大人びていて、その日も既に二三人のサラリーマンのスーツ姿がカウンター席にあつた。

「いらっしゃい。 なんだ匠かよ？ 今日はバイト入つてないだろ？」

カウンターの中から、匠と同じ位の歳格好のバーテンが声を掛けてきた。

「ああ。 奥 借りて良いか？」

ダルそうにカウンターに声を掛ける。

その男性は 肩をすぼませ視線だけで OKの合図をした。

磨りガラスで仕切られた一角は、黒い皮張りのソファーがコーナーを作り見るからに ビック席っぽい。

独りにされた葉月はお尻が落ち着かなく ソワソワとしていると 匠がビールと自分用にコーラを持ってきた。

「話しておきたい事があるんだ。 長くなるけれど良いかな？」
ふーっと大きな溜め息をついて匠が話始めた。

「いいのかい？ 優奈さんに聞かなくとも？」

匠の話は多分 母親のことだろう。葉月が知りたかった秘密。
けれど、優奈の許可なく知り得ることに少なからず抵抗があつたこ
とも事実だ。

「良いんだ。 貴方だから話しても良いと思つた。 きっと母
さんも いつかは貴方に話さないといけないと考えているはずだか
ら。」

今までの匠とは違う。

年齢よりも落ち着き他人を喰つたような高飛車な態度で 葉月を見ていた二十歳の青年は 今 歳相応のはにかみを見せていた。

・・・・・

母さんは今の俺より若い頃から、俺を育てるために苦労をしてきた。

シングルマザーとしてたった独りで俺を育ててくれたんだ。産まれた時から父親はいなかつたが母さんは溢れる愛情を俺に注いでくれた。

「どうして僕ん家には他のお家の様にパパが居ないの？」そんなことを聞いたこともある。

母さんは、少し淋しそうに微笑んで、

「匠はパパが欲しいよね。でもね。パパはもう遠くに行っちゃって会えないんだ。

ママだけじゃ駄目かな？ママだけじゃ頼りない？」

ギューッと抱き締めてくれた母さんの身体が心なしか震えているような気がして、パパの事を言っちゃひママが悲しむ・・・・・幼心にそう感じた・・・

「パパに会いに行こう！」

そう言ってアパートの裏山に登った。

街の灯りが遠くに見えるが、星空が美しく輝いている。

その中の一つの星を指して

「匠のパパ。彼処に匠吾さん居るわ。

いつも私達を見守ってくれてるのよ。いつも同じ場所からいつも同

じ光で照らしてくれてる。」「

俺を抱き上げ頬ずりしながら、母さんは愛しそうに遠くを見ていた。

長野県松本市。

俺が高校まで住んでいた街。

母さんは大学を卒業後、一年間高校の講師をし教諭になった。
幼い時から母さんは厳しかった。けれど父さんが居ないと寂しさは感じなかつた。

母さんは友達や教師仲間との付き合いを捨てて、俺といる時間を大切してくれたんだ。

中学時代には、息子だけの為に生きている母のことが煩く感じて反発したこともあつた。

しかし、そんな時期はあつといつ間に過ぎ去り、高校の口の悪い友人達は俺をマザコンだと囁し立てたりもしたもんだ。

そのだび、俺は

「マザコンの何処が悪い。母親を大事に出来ない奴は最低だ。そんな奴に限つて女を馬鹿にするんだ。」と反論した。

大学を決めるに当たつて地元の国立を目指すつもりだったが、母さんが都立の採用試験に受かつた事で事情が変わってきた。其ならば俺も一緒に東京の大学を受けよう。そうすれば母さんを独りにし

なくて済む。

そうして 僕はあの大学に合格し、母さんと一緒に東京に越してきた。

母さんにとつて良い思い出ばかりがある街ではないはずだ。けれど、母さんは決断したんだ。
多分、それは俺の為だと思う。

俺の友人達は、殆んどが東京の大学に進んだ。俺は検事を目指していたから、別にどの大学の法学部でも良かったんだけど、いつか家で友達と話しているとき、うつかり口を滑らせたことがあったんだ。

「あー良いよな。俺も東京 行きてえな～」

早稲田を田指している友達にそんなことを言つたらしい。

其を 母さんは知つていた。

だから、母さんは東京に戻つたんだ。

父さんの事は、俺も 殆んど解らない。母さんと高校の同級生で、俺が生まれる前に死んだってことぐらいしか 知らない。

俺を産んでから、母さんは大学に進んだ。

その時に力になつてくれた母さんの友達が 以前 少しだけ話してくれた事がある。

俺の父さんは、大きな会社の一人息子で 母さんとの交際を反対されていたらしい。

二人の間にどんな事があつたのか、判らないが俺は望まれて産まれてきたんだと、その人は言つてくれた。

俺の存在が 母さんに生きる力を与えたんだと・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

そこまで一気に話した匠は 涙を溜めた目元を掌で隠した。
キッと 今まで我慢していたんだろう。 彼の高飛車な態度は、精一杯の強がりだったのだ。

彼自身 強くならなければ、早く大人にならなければとの強迫観念に縛られているのかも知れない。

「匠君。 俺は 優奈さんに幸せになつてもういたい。 勿論 君にもだ・・・
けれど、彼女が匠吾さんを吹つ切れる為には、まだ 何かが足り

ないんだ。

彼女が、君にも本当のことを話せていなかつ。長野に居た間、止まつていた彼女の時間は、よつやくここに戻つて動きはじめたんだ。

だから、もう少し・・・時間が欲しい。」

葉月が言つた言葉に 匠は頷いてくれた。

葉月の苦惱に気付いてくれたのだらう。・・・本当に・・若いのに 気をまわしそうだ・・・

狹間（前書き）

更新が随分遅くなりました。申し訳ありません。葉月と優奈の関係はこれから少しずつ変わつて行くだろつと思います。

匠の話を聞いた葉月は、暫く眠れ無い夜を過ごした。

何を考えていても、優奈のことを考えてしまう。唯一授業をしている時だけは、彼女のことが頭から離れていた。自分に向かってくる真剣な80もの瞳に、自分自身の悩みなどで応えないわけにはいけない。

「葛先生？ 大丈夫ですか？ 顔色が悪いですよ？」

優奈が、心配そうに葉月の顔を覗き込んだ。

あれから、一週間殆ど熟睡できていない。酒の力を借りても、神経が高ぶつて熟睡できずに居た。

口元に力の無い笑みを浮かべ、「大丈夫ですよ。ちょっとと風邪気味なんでしょうか？ 心配掛けすみません。」

そう言つた葉月の言葉に被さるように、チャイムが鳴つてしまつた。

各々の教師が、席を離れていく。葉月も机に手を置いて立ち上がつた。

今日の授業はこれで終わりだ

不意に周りの景色がゆらゆらと歪んで見える。

「葉月さん！」

優奈の声が遠い所から聞こえてきた。

葉月は机の角に頭をぶつけて倒れてしまった。

* * * * *

耳に心地好いアルトの声

葉月が目を覚ますと そこには涙を堪えた優奈の心配そうな顔があった。

周りの景色には見覚えはない。 口に壁に囲まれた無機質な部屋。

混濁していた意識がハツキリとしてきた葉月は、ベットの上で起き上がりとした。

ぐらつ

急に頭を上げた為、目眩が襲う。 頭に手をやると掌に布の感触があつた。

包帯？

「駄目です。急に起き上がりちゃ！ 頭を三針縫つたんですよ。今日一日は安静だと先生に言われていますから。」 優奈が泣きそうな顔をして怒っていた。

「済みません。僕、どうしたんですか？ どうして頭を傷つけたんでしょう？」 いつもと違う優奈の剣幕に戸惑いながらも、涙を溜めた彼女の瞳に見いられていた。

「葉月さんは6限目の始まる直前に職員室で倒れたんですよ？ その時、頭を打ったから結構出血してしまったんです。頭を打つているから救急車を呼んだ方が良いと、保険医の櫻井先生がおっしゃって下さって。」

優奈の話では、葉月は机の角で頭を打ったため出血が酷く傷口が開いていたらしく……

「お医者様が、大事を取つて今夜は入院してくださいって言つていました。明日もう一度CTを取るそうです。」

「（迷惑をおかけして、すみません。僕はもう大丈夫ですから、先生は……）迷惑をおかけして、すみません。僕はもう大丈夫ですから、先

（帰つてください）と言いつになつた。急かしていると取られるんじやないだろうか？

でも、これ以上迷惑を掛けるのも……どうしよう……

「葉月さん？ 気分が悪いんじゃないですか？」 黙ってしまった俺を彼女が心配してしまった。

「いいえ。大丈夫です。」

「そうですか？じゃあ、何か飲み物を買ってきますね？」
そう言って、優奈は自分の鞄をもつて病室を出て行った。

白い無機質な部屋にとり残された葉月は、大きくため息を吐いて眼
を閉じた。

優奈が

狹間（後書き）

更新は、これからもマイペースで進めて行くつもりです。これからも応援してくださいね。

告白

葉月が眼を覚ますと、優奈がベッドの横の椅子に座っていた。

「気が付いたんですね？ 気分はどうですか？」

優しそうに微笑む優奈を見ていると、思わず抱きしめたくなる。

「大丈夫です。」

クスッと優奈が笑った。

「葉月さんは、大丈夫です、ってしか言わないんですね？」

「すすみません。」

「謝ることなんて無いですよ？ 起き上がりそうなら、これに着替えてくれますか？ シャツに血が付いているので。」

フフフと笑いながら、優奈は紙袋からゆつたりしたTシャツとジャージを出してきた。

「匠に持つてこさせたんです。あの子のものなので、少し大きいかもわかりませんが着替えてください。匠もビックリしていました。『早く元気になつて飲もうつて伝えてくれ』って言つてましたよ。ほんとに、年上の葉月さんを何だと思っているのか・・・」
匠のことを話す優奈は、本当に楽しそうだ。

「匠君にも迷惑掛けて・・・そりですね・・・早く元気にならないと・・・

「有難うござります。じゃあ、お言葉に甘えてお借りします。」

俺は、匠に借りたTシャツとジャージに着替え閉じていたカーテンを開けた。

「今夜は私が付き添いますね？」優奈も楽な服装に着替えている。

「そんな・・良いですよ。其処まで迷惑掛けちゃ・・それにたいしたこと無いですから・・」

俺は、幾らなんでも其処までしてもうのは、彼女でもない優奈に迷惑だと思った。

「匠に言われたんです。きちんと話をしひひーつて。葉月さんこひやんと話せって・・

あなたは、きっと理解してくれるからって・・・」「優奈の顔は、泣き笑いのような表情を浮かべていた。その顔を見たとき、俺の心は決まってしまった。

・・・びつひつ・・・こんなに悩む必要があつたのか・・・・

「話してくれますか？」

「聞いてくれますか？」

* * * * *

私と彼 伊勢宮匠吾は同じ中学からこの高校に進学してきた数少ない生徒だった。

匠吾は秀才で正義感が強くて何より優しかった。私の境遇を知っている彼は、何かにつけて私を助けてくれた。いつの間にか一人は一緒にいるのが当たり前になり、匠吾が生徒会長に立候補したとき彼の推薦で私が書記に立候補した。出来るだけ一緒にいたかったし、匠吾といふだけで幸せだった。

私の父は小学3年生の時、癌で亡くなつた。それから母は女手一つで保険の外交員をしながら私を育ててくれた。生活は裕福ではなかつたけれど、母は精一杯の愛情を与えてくれたの。けれど、その母も高二の夏、8月20日だった。心筋梗塞で呆気なく死んでしまつた。

お得意様の会社の口ビーだった。

「イセミヤコーポレーション」

そう。 匠吾の父親の会社だった。

知らせを受けた私は、病院に駆け付けたけれど母の臨終には間に合わなかつた。

白い布を被せられた母は微笑んでいるみたいに穏やかな顔をしていた。

私は横に立っている男性にペコリと頭を下げ

「お世話を掛けました。有り難うございました。」誰かも判らないが礼を言つていたらしい。

実のところ、今でもその時の記憶は無い。

気が付いた時には、私は自分のアパートに座っていた。葬式の準備は伊勢宮啓吾が取り仕切ってくれた。私はまるで霧の中に居るようで周りが何も見る事が出来なかつた。

身内だけの、身内といつても私と母しかいないんだけど、保険会社の支社長と外交員の友達、高校の担任と数人の友人、そして伊勢宮啓吾さんと匠吾が母を送つてくれた。

母が部屋からいなくなり、小さな骨壺に入つて帰つて来た夜、私と匠吾は結ばれた。

母の死から三日間 葬儀の時にも、どうしてか出てこない涙が嗚咽と共に溢れてくる。

・・・独りぼっちになってしまった・・・

泣き続ける私を抱き締め、匠吾は「結婚しよう」と言った。

「お前を一人にはしない。大学を卒業後に言おうて思つていたけど、高校を卒業したら直ぐ結婚しよう。俺がお前を守る。お母さんの前で約束してくれ?」

それまで私たちは地元の国立大学を受けるつもりだった。しかし、彼の家から離れる為に広島の大学を選んだ。彼は自分の母の執拗から逃げ出したかったのだ。地元に居れば私との仲を裂かれかねない。

そして、冬・・・・それはクリスマスの翌日だった・・・・

前日のイブに、私のアパートに泊まつた匠吾はクリスマスの夜、伊勢富の家で私との結婚を認めて欲しいと懇願していらっしゃい。母親は激怒し息子の頬を殴り、匠吾は母の執拗から逃げるようバイクを走らせ私のアパートに向かっていたのだ。

昼の雨は夕方から霧に変わり、夜には雪になつていた。いつもは無茶なスピードなど出さない匠吾がその日は100キロ以上のスピードを出していた。

その頃、私は部屋で匠吾が昨夜左手の薬指に嵌めてくれたシルバーの指輪を見つめて幸せに浸つていた。

その時だつた・・・

キキキキ ガチャーン と 途轍もない音が聞こえ、誰かの「事故だー！」の叫び声。

例えよつの無い胸騒ぎ

怖い

見たくない 怖い

けれど・・・私は駆け出していた。

裸足のまま、雪がシャーベット状に積もっているアスファルトの上を走った。

250ccのバイクが横倒しになつていて、男性が倒れていた。頭の下から真っ赤な血が流れで雪を染めている。

「いい——や——————

私は匠吾の身体を抱きしめ叫び続けていた。

匠吾の身体は糸の切れたマリオネットのようだらりとしたまま動かない。

救急車が匠吾を運んでいく。

意思の無い私は、救急隊員に促され一緒に乗り込んだ。

握っている手が、徐々に冷たくなっていくのが信じられない。

・・・これは・・夢だ・・悪い夢を見ているんだ・・・早く目を覚まさないと・・・・

救急病院に運ばれた匠吾はすでに息絶えていた。暫くして駆けつけた彼の母親は私の顔を見て激怒し掴み掛かってきた。

「どうしてあなたがここに居るの？あなた達親子が私から匠吾まで奪つつもりなの？」
夜叉のように睨んだ人は何をいつているのか？

私は霧が掛かった頭で考えようとしたが、上手くまとまらない。判らない。

私の腕を痛いほど掴み揺さぶつた。「何とかいいなさい。匠吾を返して————」

「久子止めなさい。」伊勢宮啓吾が妻の久子を止めてくれた。

「触らないで。私が何も知らないとでも思っているの？あなたと眞藤かおりさんの噂は私の耳にも入っていたのよ！バカにするものいい加減にして。あなた達親子は、私から何もかも奪っていくつもりなの？泥棒猫。私の前から消えなさい。匠吾から離れなさい。」

「匠吾————」

伊勢宮久子の言葉は、私の心に抜けない楔を打ち込んだ。

・・・お母さんが匠吾のお父さんと・・・そんな・・・いや・・・

「違う。優奈ちゃん違うんだ。お前も勘違いだ。私と彼女とは何もない。唯の仕事のつながりだけだ

「伊勢宮が悲痛な声を上げた。

それから、一生懸命、伊勢宮が何か話していたが、私の耳には届かなかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3407b/>

桜の木の下で

2010年10月21日22時45分発行